

フォーラム「福岡・博多の歴史的風景 ～風格のある都市づくり～」報告

コーディネーター：藤原恵洋氏（九州大学教授）
助言者：丸山雍成氏（九州大学名誉教授）
パネラー：長谷川法世氏（博多町家ふるさと館館長）
毛利和雄氏（元NHK解説委員）
帆足りえ氏（元西日本リビング新聞社統括編集長）



フォーラム開催主旨：

福岡市は、古代からアジアに開かれた商都として繁栄し、特に古代鴻臚館官貿易や中世博多貿易による文化交流は、現代の日本文化にも大きな影響を与えてきた。しかし、16世紀に堺と並び「自由都市博多」と云われた中世博多の町並みは、度重なる戦乱によって焼失した。博多は、豊臣秀吉によって朝鮮の役の兵站基地として復興し、「博多町割り」が整備されたが、江戸初期に入国した黒田長政は、福岡部・博多部を合わせた城下町の再編を行っている。現在の福岡・博多の町並み景観は、江戸時代の城下町の町並み・町割りを継承したものである。福岡市のランドマーク、シンボルとしての福岡城跡を「城らしく」整備・復元し、あわせて城を核とした城下町の町並み景観を一体的に保存整備することや、博多部の由緒ある寺社を活かして、風格のある都市づくりを目指すための方向性について論じ深める。

第一部：各分科会からの報告

分科会報告（内容は各分科会報告のページを参照）を受けて、藤原恵洋氏から、今後の福岡の歴史的風景を考える上で、第一日目の鳥巢京一さんが基調講演で話されたような福岡を鳥瞰的に大きく捉える視点と、各分科会で行われたような細やかな中間的な視点が必要であるとの感想があった。

第二部：パネルディスカッション（発言要旨）

藤原：福博の歴史的風景に関して、それぞれのお立場からご意見ください。

帆足：昨年まで、『リビング福岡』の西日本リビング新聞社の統括編集長をしていました。紙面アンケートから読者の大多数である女性、あるいは市民の視点を紹介したいと思います。

先日、ソウルから1時間位の所にある韓国民俗村に行きました。伝統家屋を380棟ぐらい移築して、庭も建物の構造を活かし造られていて、当時の暮らしを再現するために鶏や豚が飼われ、服装も当時の服で野菜づくりなどをして生活しています。北部・南部・中部の伝統家屋があり、それぞれの地域によって家屋の造り方が違い、それは気候・風土によって生まれています。ちょうど韓国の子どもたちも来ていて、暮らしの知恵や歴史の積み重ねを一生懸命学んでいる姿を見て、このようなことが大切だと思いました。その地域ならではの生活の知恵や歴史が、その地域の共同意識を培い、暮らしの知恵を学ぶことだと思います。それを失うと、例えば福岡市では飲酒運転や性犯罪が多いという現状がありますが、みんなで暮らしているという意識が希薄になっていることの現れではないかと思うのです。

毛利：今年2月末までNHKの解説委員をしていました。3月から瀬戸内の歴史的港湾都市である鞆の浦に住んでいます。NHKでの仕事は歴史遺産のことで、以前は考古学が中心でしたが、最近はまちづくりとか、とりわけ世界遺産に関心を持っています。かつて福岡に来たとき、中洲の辺りを歩いていて鐘楼流しにばったり出合ったことがあります。そこで、昨日の町歩きするとき、中洲川端にある飢人地蔵の場所を訪ねたら、福岡の人でも「知らない」と言う方が多かったのが印象的でした。

福岡の歴史的風景とは港湾都市だということ。そして博多といえば、長谷川法世さんの「博多ッ子純情」の中の景色、例えば櫛田神社や山笠です。鞆の浦は宮崎駿監督の「崖の上のポニョ」の舞台になりました。つまり、歴史遺産は芸術にしてもエンターテインメントにしても、創作活動の源泉にもなりうる価値も持っています。最近はそので生活している人がつくりあげている町並みや文化的景観も、歴史遺産として考え保護していくところまで来ています。そうしたリビングヘリテージが創作活動の源泉になる一番大きなものは、目で見た形で史跡なり文化なりが伝わってくるもの、都市の場合だと町並みや都市全体の景観に象徴されるわけです。



そういう考え方に立てば、このフォーラムのテーマを「景観の面から見て、どういふ福岡博多をつくっていけばよいのか」ということにも置き換えられます。今年の世界遺産条約 40 周年を記念して、去年、ユネスコが歴史的都市景観に関する勧告を出しました。歴史的地区とか建造物だけでなく、その周辺を含めて都市を一体として考えたとき、福岡という都市景観は先々どうあるべきか、長いスパンで考えていかなければならないし、これは都市計画がどうあるべきかということそのものでもあると思います。

長谷川：一年の内に山笠の振興会の総会が 5 回あります。つい先日の 6 月 1 日も総会で、直会（なおらい）なのですが、私は市の嘱託職員ですので、飲んだらいかんとされるのです。直会は、神事の締めに行き行って現実に戻る、ハレからケに戻るために、神様と一緒に御酒をいただいたり食べ物を食べたりする重要な儀式です。そのような文化をどう考えるのか。「文化と観光」両軸で町おこしをするとよく言われますが、あくまでも観光は二の次だと思うのです。「文化と観光」というのであれば、飢人地蔵のことを知っていてほしい。とくに、福岡部の人は博多部のことを知りません。そこに福岡市の双子都市という二面性を感じます。独自性を観光というのであれば、その二面性をもって、福岡市を売り出せばいいのではないのでしょうか。博多の名はもう売れていますから。

やはり問題は、地元の人が町のことを知らないこと、地元以外の方が町に興味を持って様々なことを調べて町おこしをしていることです。また、戦後、福岡部、とくに天神には人が住めないように都市開発がなされました。「福岡にはランドマークが無い」という声があります。そこで、天守閣を復元しようとする人たちもいますが、私はやめた方がいいと思います。周りはビルばかりで、天守閣を建てても見えないからです。博多でランドマークと言えば、櫛田神社のイチョウや聖福寺、承天寺などのお寺です。福岡部にも以前はランドマークがありました。福岡で最初の高層ビルだった天神ビルです。このビルはタイルを非常に濃い焦げ茶色にしました。きらびやかにすると町が軽薄に見えるので、沈んだ目立たない色を選んだのです。すばらしいことだと誇らしく思いました。その天神ビルも、今や他のビル群の中に埋まり込んでしまっています。戦後の再開発のための都市づくりが、福岡の町からランドマークを無くしてしまったのだと思います。

博多でもその都市開発のとき、承天寺や聖福寺のお寺の境内をぶち抜いて道路を造ることになりました。聖福寺などのお寺は絶対に境内に道を通さないと断ったので、承天寺の境内を寸断した道だけが残りました。その道を今度は境内に戻そうかという話も出たのですが、それはできないので、対面通行を一方通行に、あまり車が通らないようにして、昔、辻の堂門があったので、ウエルカムゲートのようなものを造ろうという計画があります。そういうことを福岡部の人はほとんどわからないし、博多でも北の方の人は知らない。福岡部と博多部の情報を交流させるというのは難しいことなのです。これは、長い間、福岡部と博多部を仕切っていた枅形門と石垣が示しているように、武家と町人地がはっきりしているんですね。その独特の仕組みも考えて、今からの文化の発展や波及効果としての観光を考えていくべきではないでしょうか。

丸山：福岡と博多を統一して考える立場で話を進めたいと思います。歴史的には博多の方が古代中世近世とずっと続いてきて、福岡が近世になって発展してきたという経緯がありますので、この福岡市内に生きる人は博多を中心に、よその人たち、外国の人たちも交易するときは博多港にやってきますので、博多が中心の部分が多いのです。



福岡城は、姫路城から始まりまして、秀吉が九州に入ったときに、黒田氏は大分中津の城を造り、天守閣を構築しました。その次の名島城は小早川隆景に造らせました。秀吉は九州を平定したあと中央に戻って小田原、東北を支配して、そのあと再び九州にやってくる名島城に移り、名護屋城をつくりました。このとき、黒田如水・長政は大きな役割を果たします。そののち朝鮮に出兵して、朝鮮にも「倭城」をたくさんつくりました。多くの大名は倭城の造り方を覚えて、とくに関ヶ原の戦いでそういう城を造っていきます。これを織豊城郭といい、織田信長は安土城の優れた天守閣を造りました。福岡城もその流れの中で造られました。朝鮮出兵したことで、朝鮮の城づくりの技術も取り入れながら多くの城が造られました。ですから、九州の城は戦国時代から発展していることが分かります。

近世の城はどれも似ていると思うかもしれませんが、実は名護屋城は少し違っていて、鍋島直茂が名護屋城の天守閣を献上しました。九州ではあちこちに織豊時代から天守閣ができました。これはなぜか。外地から発展してきた技術と、中央からきた技術とを融合して新しい福岡城を造りました。いま福岡城として国が指定している所は、私は、内城（うちじろ）と考えます。那珂川の中島橋の枅形門から唐人町の黒門まで、一方は博多湾（海）で、もう片方は山で囲まれた所が准内城だと考えてください。以上が内郭で、外郭としては御笠川石堂口門から博多、南は辻堂口、西は唐人町から室見川まで。福岡城は非常に幅が広く、武家屋敷、町屋敷、農村部も含めて、そういう構造を福岡城と言っています。福岡城の特徴は、中世の城のなごりを残している外城と天守閣をもつ城の中間の城として位置づけられます。

藤原：福岡博多では、これまでの分脈をどのように活かしてきたのか。また、今はどのような歴史的風景が必要だと思われますか。私たちの町・福岡にとって適切な道筋をお話ください。

毛利：昨日の町歩きで博多堀を目にしました。知っている人があまりいないようですが、戦国時代、博多に島津が攻め込んで町を焼け野原にした、そのときの瓦礫を再利用して造った堀です。

東京でも江戸城の天守閣を復元しようという動きがあり、NPOの方が訪ねてきましたので、「天守閣は必要ありませんよ。東京にとってランドスケープとは何かを考えるにあたって必要ありません」と申し上げました。江戸城の天守閣は最初があったのですが、火事で焼けてしまいました。そののち、平和な時代に天守閣はいらないということか、あるいは財政的な理由か、復元されませんでした。ですから、江戸時代の長い間、江戸城に天守閣はありません。江戸の浮世絵を見ても、手前に隅田川があって、江戸城があって、向こうに富士山が見える、と定型化しますが、天守閣がないのが江戸の町だとしてみんな過ごしてきました。まして、なぜ今、復元する必要があるのかと思うのです。

福岡城の天守閣も、あったかどうかははっきりしないし、どんなものであったか分からないのに、どうやって復元するのか。将来の福岡にとって、アジアでも有数の国際都市になるためにいかに発展させていくかが今後の課題と思いますが、そのときに重要な点は、弥生時代から対外交流が盛んで、いろんな文物なり思想なりが流れ込んできたのが福岡の歴史であることです。しかし、平安時代や江戸時代に日本全体が内向きになり、その時代は福岡が窓口になっていません。江戸時代の数少ない対外関係で、朝鮮通信使は非常に象徴的な意味を持っています。秀吉が朝鮮出兵をしたため、家康が非常に苦労してまた関係を築いていきます。その朝鮮通信使の寄港地を考えると、福岡藩は福岡の町に通

信使を入れていません。江戸時代の歴史的な建造物が仮にあったとしても、外国人に対して福岡を象徴するものになるのか、極めて疑問です。福岡はすでにアジアを代表する国際都市ですから、海外の人との交流をいかに深めていくかが重要であって、それは決して何か新しくものを造らないといけないのではありません。もっとソフトの面でいろいろ工夫しないとイケないし、対外的にも、歴史遺産をいかに活かしていくかは重要だと思います。かつてあって、みんなが「そうだな、こんなのがあったな」と思えるものは復元する意味があるかもしれませんが、それはせいぜい近代のもので、今壊れているものを復元するぐらいでしょう。江戸時代以前のは、日本全体を見ても、遺跡としての整備は必要ですが、建造物として復元しなければいけないものは極めて限られていると思います。

丸山：天守閣のあった場所は国の指定史跡ですので、現時点では残念ながら復元はできません。文化庁にその方針を変更してほしいとお願いしていますが、現状は難しいようです。ですが、国の特別史跡である吉野ヶ里は穴だらけなのに、それで建物をいっぱい造っています。それに比べて、近世の城の復元は非常に厳しい。三点セットと言われ、発掘して、地図があって、写真がないと難しい。

幕末に天守閣はありませんでしたが、慶長7年頃に柱を天守台に建てたという記録はあります。それから天守閣を壊したという記録も、細川忠興親子の間の手紙に書かれています。元和5年に広島城の石垣を修復した福島正則が、これを理由に改易、取り潰しになります。ちょうどその頃、幕府が大坂城の修復をするというので、細川忠興は、福岡藩を取りつぶされないように幕府に誠意を尽くす意味で、現在の裁判所前の土塁が高い石垣だったのですが、その石垣を取り壊し、石を献上します。それと同時に、福岡城の中の天守閣や特定の家も壊して持っていった、と当時の手紙に書いてあります。元和6年には福岡城の天守閣は完全に消えます。そのあと復興を一生懸命試みますし、幕府に再興を働きかけますが、実現しませんでした。近世の頭には天守閣がなくなりましたので、幕末には復元しようとしても、凶面など一切なく復元不可能だったのです。

帆足：以前「リビング福岡」の読者に、福岡で好きな風景、残したい町の風景、心に残る風景についてアンケートして500以上の回答がありました。その中から紹介します。「祇園とか御供所などのお寺の多い通りはホッとした気持ちで心が洗われる気がします」、「お寺の町に伝統を感じて落ち着きます」、「櫛田神社とその路地の古民家は昔の博多の繁栄を思わせて、なにか存在感を感じ力がみなぎってくる」、「櫛田神社そのものが私のパワースポットです」、「博多の町を歩くと心が和む」。20代、30代の非常に多くの人が、博多部の町を歩くと力が湧く、心が落ち着くとおっしゃっています。



福岡に暮らす人たちが博多を歩いて心の拠り所になっているのは、地域の方たちが上手に、その地域の民俗的なお祭り、文化、歴史的な建造物を守りながら伝えている、それが私たちの生活の中に根付いているのが大きいと感じました。一方で、非常に残念なのですが、本来は歴史が多く残っているであろう福岡城跡や大濠公園には、心の拠り所になっているという意見がほとんどありません。そのアンケート結果に、一つ何か見えてくるものがあるような気がします。

ただ、福岡の中でも、春吉は地元の人が路地文化を発信していこうと努力されています。春吉の町歩きツアーをしたときも、若い人から年配の方まで、博多那能津会会長の岡部定一郎さんに話をしてもらいながら町を歩くと、「こんなにも歴史があって、愛すべきところがあるんだ」と好評でした。ですから、博多部以外の地域ではもっと情報発信を行い、歴史を学び、生活風土を学ぶ、伝統文化を学ぶことが必要で、それが自分たちの生活の中に根付いて将来にまたつながって、私たちの暮らしを良くする知恵をそこから学ぶことができます。と思います。現在は、それがまだまだなされていない。

熊本の人たちの地元に対する愛着はとても強くて、心の拠り所は小さいときからずっと目にしてきた熊本城です。ですが、果たして福岡で、今まで無かったものを造ったとして、それを心の拠り所に

するかというと、疑問です。先に地元の歴史や文化を学んで、福岡に対する愛情や愛着が醸成された上でシンボリックなものを造っていかないと、いくら造っても、あるいは形骸化したものを遺しても、それは違うという気がします。住んでいる人たちが歴史を知り、文化を知り、それは自分たちに関係ないものでなく、伝えられてきたものから今の暮らしに活かせるものがたくさんあると思い、学ぶという気持ちになって、暮らしの中に密着していかないといけない。韓国や台湾やタイのバンコクは、大都市でも、地元の人たちが愛している世界遺産が町の真ん中に遺っていたりします。形としてだけでなく、バンコクでは毎朝お寺にお参りに行き、商店の人たちが当たり前のように史跡の歴史を教えてください。「日本の人たちは日本の文化をもうちょっと愛したらいいのに」と言われたこともあります。今は、あるものを活かすことがとても大切ですし、そうした所に人が集まってきて、最終的には観光につながっていくという観光社会学的な見地もあります。住民が心の拠り所とするものが文化遺産として遺っていったら嬉しいと思います。

長谷川：1995年放送のNHK連続テレビ小説「走らんか」の原案を書いたとき、博多出身の女の子を登場させて「赤ちゃんの匂いのする町」と書いたんです。「産土（うぶすな）」という言葉に、土が産んでくれる、人間も畑の作物のようにとれる、と思ったのです。長い間マンションに住んでいると、なにかずしっとくるものがありました。そうか、私はずっと空中生活をしているんだな、と。そして改めて、人の暮らし、町のつくりを考えると、やっぱり博多は中世近世都市なんです。福岡は近世、近代に「人はいらん、法人でいい」という都市の開発の進め方をしてきました。この経済の論理がずっと明治以来刷りこまれているのだと思います。黒田氏の藩政で一番良かったのは質素儉約ですね。一度だけ、お金を使って中洲に芝居小屋などをつくり歓楽街にしました。そして、今の中島橋あたりに橋を造るために、砂洲を埋め立て石囲いして中島町とし、船をつけられるようにしました。そのあと、砂がたまって東の方に今の中洲ができました。



福岡では、本当に建物がどんどん無くなっています。福岡に遺る歴史的建造物として赤煉瓦文化館を挙げる人も多いと思いますが、私は形としては大同生命ビルの赤い建物が好きでしたが、それも無くなりました。赤煉瓦文化館は福岡の基点となる0地点に建っていますが、ここはもともと枳形門があって福岡と博多を隔てていた所です。もし福岡部だけを考えれば、福岡城や県庁があったアクロスあたりが0地点と思いますが、ここが基点になっている点から見ても、やはり福博の歴史を踏まえていると考えられます。そして赤煉瓦文化館は、福岡側を背に博多の方を向いています。福岡の権威を背にして立派な建物を造りましたよと、博多の経済人に「どんどん生命保険に入りなさい」とアピールする形です。福岡と博多が分かれていることを如実に表して、おもしろいと思います。

もっと言えば、黒田藩がどんどん力を増して博多の経済力が衰えていくのは博多が海外交易できないから当然ですが、そのときになぜ博多に武士を住まわせなかったのか、なぜ福岡部に商店をつくらなかったのか。福岡部に移れば税金を少なくすると言ったりもしているのですが、もっと強行的な手段でなぜ商人を福岡部に移さなかったのか。これは、博多が太閤秀吉のお墨付きで復興し町が出来たことがあるのではないのか。黒田家は元は秀吉の家来でしたので、博多商人に強く出られなかったのではないのか。徳川自体も、大坂城を攻めたのは秀吉を否定したのではなく、秀吉の意向を無視したからと言って石田三成に対して攻めて、淀殿と秀頼を攻めました。だから殿様、本体自体に反旗を翻したのではないという考え方なのです。そのような考え方が、徳川家や黒田家の博多に対する対応に効いていると思います。城郭があれば広いのも、そうせざるを得ない部分があるのだと思います。

お城は支配の構造、戦のための備えです。私が言いたいのは、福岡市にしかないもの、日本に、あるいは世界にもないものが、この福岡にあることです。それが鴻臚館です。鴻臚館は、おもてなしの

平和的な海外向けの施設です。こんなすばらしいものがあって、今から発掘していかなければいけない所に福岡城の資料展示館などをつくるのか。もっと早急に鴻臚館の調査を進めて、吉野ヶ里のように穴があればどんどん高い建物を建てたらいいと思います。

まちづくりをひとつりからやらなければならない。前の世代、親爺お袋、学校の先生、社会に出てから出会ったいろんな人たち、そこから受けたいいものを、いいものを選ぶのもおこがましいので、とりあえず次の世代にそのまま移せるかどうか。そして、それらを少しでも改良できれば、良好というしかない。それすらもおこがましいような気がだんだんし始めています。天守閣をつくってもいいと思いますが、そこでどのような歴史や文化を伝えていくかは重要だと思いますし、天守閣とかお城は全国にありますから、観光施設と考えると今更という気がします。博多の町から昔の町家がどんどん無くなっているのを遺そうと「博多町家ふるさと館」に移しましたが、それらは大型の町家です。でもほとんどの人が住んでいたのは間口二間から四間のものなのに、それが遺っていません。町家にしてもお城にしても本当は、大型、中型、小型、それぞれ遺すべきではないかと思います。

丸山：「産土」の神は博多山笠と関係があります。それぞれの町に産土の神を祀り、全ての町が総鎮守の櫛田神社に集まってお祭りをやる、という形をとっていくわけです。それぞれの町に「産土」の神がおりますが、その総鎮守についての論文に書きました。それを踏まえて九大の方が書いた論文で、江戸末期の神社の一覧表をつくっています。ですが、博多の町は戦乱でいったん更地になり、そこから秀吉がまちづくりを行いました。ですから、中世の町は江戸時代の資料から復元するのは難しい。近世は町ごとではなく、流れで山笠を行っています。総鎮守を中心として、それぞれの町の神社が統一した形で宋町をつくっています。例えば、大友宗麟が博多の宋町（チャイナタウン）の中に教会を造るのもめて一触即発になる。キリシタンの人たちと博多の宋町の若者が対決するという時代があったりします。近世の黒田長政如水の段階になると、博多の町人の力が非常に低下します。博多の西湾が全国的に有名になって、かつての博多湾の価値が下がります。生き延びているのは松灘子、それから山笠が復活していきます。近世は、博多は非常に位置づけが弱くなります。

藤原：私たちは今、加速度的に生きる想像力を失ってしまっています。それを補うために、なにか仕掛けとか、小道具とか、遊びのきっかけを必要としてしまっています。そう考えると、ランドマークやシンボルも本来ならばいらぬのではないかと、長谷川さんの話を聞きながら考えていました。ただ、私には、赤煉瓦文化館なら赤煉瓦文化館に、博多部には博多部に、まだまだもっともっと物語があるような気がします。今から 20 年前、赤煉瓦文化館の話をいろんな方に聞いて回りました。84 歳のおばあさんに話を聞いたとき、驚いたんです。「あんたね、私はあのドームの下で昔デートしたことばあるたい」。百道浜にそのころドームができていたんですか？と聞いたら、「いやいや百道浜じゃなかと。あの赤煉瓦文化館のことを私らはドームっていいよったばい」とおっしゃったんですね。古い町並みに新規にできた赤煉瓦の建物が、待ち合わせの場所にすら使われていたということを知りました。それから、昨日「博多町家ふるさと館」に行ったら、博多仁和加が行われていたのですが、今



回のようなまちづくりの議論に、博多仁和加というようなユーモアある福博市民の存在が少し隠れてしまっている気がしました。

市民にとっての誇り、矜持としての文化資源や文化財や町並みや景観をよりよく発掘し、それを私たちは次のまちづくり資源として大いに使っていこうという議論をここでやっているわけですので、その再確認ができればこのフォーラムも充分意味があったのだと思います。

(記録作成者：嶋田絵里)